

令和6年度 第2回釧路市社会教育委員会会議【議事録】

日時 令和7年1月23日(金)10:00～11:50

場所 釧路市生涯学習センター 801号室

1. 出席委員 15名中12名出席

田丸典彦委員長、大久保 貢委員、加賀谷淑子委員、久原陽子委員、齋藤協子委員
佐藤明美委員、田中郁子委員、田中達也委員、種市文彦委員、津村伸一委員
濱口憲太委員、藤原節男委員
(欠席3名:石田憲一副委員長、大嶋春香委員、中西紗織委員)

2. 市出席者 11名

澤口生涯学習部次長(生涯学習課長)、曾根美術館長、竹内スポーツ課長、秋葉博物館長
平野動物ふれあい主幹、北村阿寒生涯学習課長、長谷地音別生涯学習課長
佐藤青少年育成センター所長、伊藤生涯学習担当係長、牧野主任(社会教育主事)
岩田主事(社会教育主事)

3. 議事等

- (1) 釧路市社会教育推進計画第1次(令和5年度)実施計画の評価結果について
- (2) 令和7年度開催の会議及び研修等について
- (3) その他
- (4) 協 議

4. 議事説明内容と質問等

議事(1) 釧路市社会教育推進計画第1次(令和5年度)実施計画の評価結果について

事務局より、釧路市社会教育推進計画第1次(令和5年度)実施計画の評価結果を説明した。

【質 問】

委 員:ABC による評価がなくなり、コメントで整理された方が分かりやすいが、マネジメントサイクルのDOにどのようにつなげるかが課題である。また情報に関し、紙ベースからSNS等デジタルでの提供に移行していく中で、その効果が数値で分かる方法はとれないか。

事務局:評価のまとめの中で、2つのご意見がどのように示せるか考えていきたい。

委 員:動物園のヒグマ獣舎改修の進捗状況を聞きたい。

事務局:同施設は、平成元年にオープンしたが老朽化が著しく現在改修工事を進めている。今年3月に工事を完成させ、今春オープンを予定している。

委 員:コロナ禍が影響をもたらした阿寒・音別地区の高齢者向け講座の現状を聞きたい。

事務局:阿寒地区の阿寒シルバー大学は、緊急事態宣言中や感染状況の悪化期間を除き、可能な限り活動を行ってきた。現在はコロナ禍前と同様に行っている。

音別地区の音老大学は令和5年度まで実施せず、6年度から状況を見ながら実施している。

議事(2) 令和7年度開催の会議及び研修会等について

事務局より、社会教育委員に係る令和7年度の会議及び研修会等の日程を説明した。

【質 問】

委 員：札幌で開催の研修会に関し、宿泊ホテルの予約が困難であり、開催日程を早めに教えてほしい。

事務局：日程が決まり次第速やかに連絡する。

議事(3) その他

事務局より、社会教育委員に係る令和6年度の会議及び研修会等の開催結果を報告した。

【質 問】

委 員：ほとんどの研修会の参加対象に行政職員も含まれており、他の市町村では若い職員が多く参加している。釧路市は毎回社会教育委員1名のみの参加であり、予算の都合もあるが、特に若い職員を参加させられないか。

事務局：出張を伴う研修は基本的に1名が現状である。社会教育委員関連の研修以外に公民館協会や社会教育主事会等が主催する研修があり、それらに職員が出られる形になっており、予算が無いなりに職員が参加して学べる機会があることをご理解願いたい。

協 議

釧路市社会教育推進計画の基本方針及び基本方策に沿ってテーマを定め、委員相互に意見を出し合い、課題の共通認識及び次期計画策定に生かすための協議を行った。

◎テーマ：「青少年の健全育成」

《主な意見》

○外国人労働者への依存が進む中、字が読めない、書けない、話せない外国の親と子を、社会教育、学校教育の課題として考えていかなければならない。

○釧路市は実習で来日している外国人が多く、子どもの通学はそれほど多くはないが、今後は変わってくると思うので準備を進めていく必要がある。また、彼らへのケアも進めていかなければ地域社会は成り立たなくなる。

○喫緊の課題は、年々依存度が高まっているスマートフォンによるネット利用で、うまく使えば成果が上がるが、低年齢化も進み、ものすごく危険をはらんでいる。しかし親のそこに対する概念が若干薄れているように感じる。SNS アプリも次々出てきて追いつかなくなっており、オンラインゲームによる不特定多数コミュニケーションも下火になっていない。一番危険なのは、一方的な主張や考え、思想がダイレクトに青少年の目に飛び込んでくることで、それに対する議論がほぼなされておらず、感化されることが少なからず起こっていると思う。昨今の闇バイトなど、よくない方向に導くような主張が散見されており、社会的な課題として大きな危惧や危機感をもっている。情報モラルやリテラシーを高めていく取組や対応策を強く行っていくと同時に、人として健やかに成長していく、精神的な柱をもてるよう、我々大人、地域の人間も含め協力していくことが大事なのではないかと思う。

○情報リテラシーを言い出したのは 30 年以上前になる。子どもたちに対するリテラシーは、小中高は

かなりよくなっていると思うが、旭川の高校生殺人事件は SNS がきっかけになっている。教育が悪いのか、そうではないと思う。これだけの落とし穴があるからこそ、学校教育だけではなく、社会全体が関わっていかなければならない。

○地域スポーツで子どもたちと接しているが、1日8時間以上もゲームをする、或いはオンラインゲームによる課金トラブルで活動に顔を出さなくなる子どもがいる。学社連携というが、学校と地域がどうパイプをつなぐかだと思う。

○学校行事の現象の一つに、入学式や卒業式での入退場時の拍手が減ったが、原因は保護者がスマートフォンを片手に我が子を撮影するため。ただ、マナーをきちんと守ってくれるので、行事や参観の最中のマナー違反は無くなってきている。子どもたちもタブレットを使用して宿題をやったり課題を提出したりという児童も出てきているので、情報機器とどう向き合うかを学校としてもルールを決めながら指導している。一方、SNS で学校を飛び越えてつながっているのも、他の学校のトラブルに巻き込まれる子どももいる。考えなければならないのは、子どもの居場所をいかに作るかということと、子どもたちの承認欲求をいかに満たしてあげるか。また、学校では本物にふれられるよう、プロスポーツ選手にパフォーマンスをしてもらったり、文化芸術を見せたりしており、子どもたちに映像の世界ではなく、本物がいかに素晴らしいかを伝えていかなければならないと思っている。あとは、子育てに困っていたり、親同士のつながりがもてなかったりする中で、PTA の存在を考え直さなければならない時期にきている。PTA 離れが進んでいくと親同士のつながりがもてないが、親同士のコミュニティを PTA という形の中では難しい内容を何かの形でつないであげないと、最終的には子どもたちに反映されていかなければならないと思っている。

○PTA 或いは活動のあり方が全国的に問われている。PTA 活動の停滞は、各家庭の社会的、経済的な大変さというものもあるが、目的感が一つになっていないように思える。SNS の問題は一例だが、親だけではなく、学校、地域が連携しながら、この問題について目的をもち、点ではなく線で取り組んでいくことが必要ではないかと思っている。PTA は親の学びの場でもあり、存在意義を明確に高める時期でもあると思っている。加えて、教員の不足、多忙化、現場の負担の増大等があり、PTA は子どもだけではなく、いかに学校を支えていくか、先生方を支えていくか、そういうところに PTA 活動の考え方をもっていけば、ひいては先生方に子どもたちの成長を高めていただけることにつながり、その活動が学校との信頼関係につながっていくと思う。

○一週間前にモラハラの研修会があったが、モラハラの定義といじめの定義がかなり重なる部分がある。モラハラがちょっとした意地悪やいやがらせと考ええると、幼児期に下の子が生まれた時に、やきもちで意地悪をすることがあるが、意地悪な気持ちは子どもに芽生え、その気持ちは大人になっても残っており、職場でも家庭の中でもどこにでもあると思う。学校教育の中にモラハラの視点を入れるとどのようなことになるかと思っている。

○一点は外国人に関し、町内にベトナムから来た方が6、7人いるが挨拶程度の関係で、私どもから話しかけたいがベトナム語なので分からない。ベトナムから寒い釧路に来て、一生懸命働いて国に仕送りしているのだらうと、そういう思いをもつ時に、少しでも地域で温かく迎えてあげることも必要と思っている。もう一点は、ヤフーなどの書き込みでさまざまな意見が出ているが、見ていると引き込まれて何時間も見ている。我々がそうなのに、子どもたちが SNS を見ないなんて絶対にできないと思っている。オーストラリアでは SNS の利用に年齢制限があるようだが、このまま放置しておく大変なことになるのではないかと危惧している。

- 大学はどうかというと、釧路外から来ている学生が多く基本的に一人暮らし。PTA のような組織はなく、青少年の健全育成をどのようにフォローしていけばよいか課題がある、悩んでいる学生は多いと思うが、なかなか言ってくれないし相談にも来ない。200 人以上が釧路外の学生で地元に戻るには遠いし、孤独というのは避けられないが、そこをどうするのか大学側も悩んでいる。部活などの居場所があればよいが課題提起に過ぎないと思っている。もう一点は、10 年以上前、外国人受け入れ促進に関連して、移民難民を受け入れている国で調査し学会で発表したけど、矛盾があって、言葉を話せない移民難民にどう対応しているかを調べたけど、言葉の壁があり、かなり大変のようだった。日本語を片言でも話させることが一番よいと思っている。
- 阿寒本町は人口が減り、子どもたちもとても少ないが、出会ったときには子どもから挨拶をしてくれる。ボランティアとして読み聞かせをしており、公民館図書室では以前毎週土曜日の開催だったが、参加してくれる子どもが減少し、現在は月2回に変えて行っている。また、学校で参加の声掛けをするけど、今の子どもたちはやるのがたくさんあり、なかなか来てくれない。幼稚園入園前の子どもが少しずつ来てくれるようになったので、そこに期待している。
- 子どもの読書活動推進に関わって、昨年ビブリオバトルの大会が開催されたけど、参加は高校生の2人だけだった。小さいころから体験していないため、どうやればよいのか分からない子どもも多いと思う。筑波大学ではビブリオバトル入試というのをやっていて、書くだけではなく、どのように伝えるかを重視している。文を書く能力と話す能力どちらも必要なので、ビブリオバトルはよい事業だと思っている。今の子どもは、「うざい」「だるい」で済ませて、言語力が低下傾向にあって、読み聞かせをやっているけど、本に興味がないから行かないという子が増えてきており、学校での朝読書に加えて、ビブリオバトルで活性化できればよいと思う。
- 更生保護のボランティアをしているけど、罪を犯して刑務所に入る人の中には、家庭内での虐待、学校でのいじめに関わった人は少なくない。刑務所から出てきて家庭に戻れない人の更生施設に行くけど、何度も出たり入ったりする人がいる。犯罪自体は少なくなっているけど再犯がとても多く、子どものころからの家庭や学校の教育が大事だと思っており、資料にある青少年の健全育成事業、市としても力を注いでほしいと思う。
- 学校の外で遊んでいる子どもたちの姿を見たり、町内で子どもに声を掛けて挨拶されたりするとうれしい気持ちになる。さまざま問題があるというけど周りにはそんなに感じていない。地域コーディネーターの役割で釧路小学校に行くと子どもと接すると、地域と学校のつながりが深まり、子どもにとっても大人から受け止めるものがあると思っているので、大人の目が届くようなことは必要だと思っている。ウインズヒルスーパーアリーナで、指定管理者とスポーツ協会の共催で、ミラクル広場というイベントがあった。いろいろなスポーツを体験してもらう行事で、小学生以下の子どもと保護者合わせて1,634 人が参加した。子どもにスポーツを体験させたいという親の気持ちがあって参加したと思うけど、スポーツを通じて心を育てていくことにつなげたいという親の思いがそこにあると感じた。その一つ一つのことに、子どもが大きな間違いを起こさないよう、大人の目が注がれなければならないと感じている。